



第17回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

キャッシュレスを通して見えてきたこと

鹿児島県・鹿児島県立甲南高等学校 2年 池上 楓佳

今年6月、修学旅行で東京へ行った。3泊4日の行程で高校側から設けられたお小遣いの上限は3万円だった。私は、半年ほど前から決めていたことがあった。「キャッシュレスに挑戦してみよう」ということだ。3万円のうち1万円をデビットカード、1万円を交通系ICカード、5,000円をQRコードでのスマホ決済、という内訳で用意することにした。この試みのために、自分名義の銀行口座の開設も予めしてそれぞれの決済への備えをしておいた。最初は強気だったが、全てキャッシュレスで東京に行く勇気もなく、実際は現金を5,000円だけ財布に忍ばせて行った。

さて修学旅行を終えてどんな結果になったか——。使った現金は750円だった。できれば現金を使わずに済ませたかった修学旅行。友人とスイーツを分け合った際に、割り勘のために現金が必要だった。割り勘機能のあるスマホ決済アプリもあるが、友人がそのアプリを持っていなければ分け合えない。仕方がなかった。

しかしそれ以外の場面では現金を使わずに過ごせた。自由行動中の電車移動やコンビニでの買い物には交通系ICカード、お土産やテーマパークでの買い物にはデビットカード、それ以外は、スマホ決済が使える店では優先的にスマホ決済を使った。還元キャンペーンもあり、得した気分だった。

そもそもなぜ、キャッシュレスに挑戦しようとしたのか。先進国におけるキャッシュレス決済の普及率がスウェーデン52%、韓国96%、イギリス69%、などに比べ、日本では20%と低い¹⁾ことはよく知られているが、九州ではその度合いがさらに低く、私の住む鹿児島県では10%程だ²⁾。全国43位だ。高ければ良いというものでもないかもしれないが、この数字を見た時、鹿児島はすごく取り残されていると感じた。高校生の私はまだクレジットカードを持つことが出来ず、そもそも鹿児島県内ではキャッシュレスでの支払いに対応し

ている店舗が少ない。そのため、日ごろ現金での支払いを余儀なくされることが多いが、東京ではどうなのだろう、地方とはどのような点が違い、鹿児島ではこれからどうキャッシュレス化を進めていけば良いのだろう、メリットやデメリットは発見できるだろうか、と思い、まず修学旅行の機会に挑戦してみようと思ったのだ。

東京で実際にキャッシュレス体験をしてみて思ったこと——、それは「便利だ」ということだ。電車の乗り降りの際に行き先と料金をいちいち確認して切符を買う必要もなく、交通系ICカードをかざすだけだ。カードを紛失することと、残高の心配さえしておけば良く、時間の短縮にもなる。さらにこのカードでタクシーでの支払いも出来たしコインロッカーのカギ代わりにもなった。大学生協の食堂でも使えたばかりか、学生証にこのIC機能が内蔵されたカードがあったのには驚いた。デビットカードもほとんどの店舗での買い物に使えたし、スマホ決済と併用してうまく買い物をしたつもりだ。ICカードやデビットカードも、スマホ内のアプリに置き換えればさらに便利だったかもしれない。ただしこの場合は、スマホの充電の心配と、スマホそのものを紛失する心配も出てきただろう。

東京では2020年のオリンピックに向け、キャッシュレス化が進んでいるように感じた。さながら2012年のロンドンオリンピックを契機にイギリスで一気にキャッシュレス決済が普及したように。私はこの夏、鹿児島県の派遣事業でイギリスへ行く機会を得たが、確かに、どこへ行ってもカードで支払いができ、現金お断りの店やバスまであった。両替の手間や手数料を考えると、旅行者にはありがたいことだったし、手元に外貨のポンドが残らなくて済む。もっとも、外貨を使う楽しみや実感は少なくなってしまうが。

東京でキャッシュレス化が進むのに加え日本全体でも、今年の10月からの消費税増税に伴う、特定の中小店舗でキャッシュレス決済をした場合に支払いの2%か5%相当が還元される政府のキャンペーンに合わせた流れも感じ取れる。なぜキャッシュレス化が推進されるのか。日本を訪れる外国人旅行者の不満の上位に「現金しか使えない」ことが挙がることへの対応や、外国人技能実習生の増加に伴い、日本の銀行口座を開設しなくてもスマホに直接給料を送金できる利便性も注目されている。また、貨幣の製造コストを減らし、ATMの維持

管理コストや現金の運搬に掛かる人件費も軽減できる。そしてお金の流れが記録され、明確になる。購買履歴や個人情報「ビッグデータ」としてAIによって分析され、マーケティングに応用できるという利点もある。一方、私たちの信用度を数値化してランク分けされ、悪用されるリスクがあることも否めない。また、昨年9月の北海道地震では、停電によってキャッシュレス決済が出来なくなるという事態が起き、現金での取引に限られた店舗もあったようだ。こういうことを考慮すると、やはり現金をある程度は持っていないと困るだろう。私が修学旅行の際に全く現金を持たずに行くことが出来なかったのにはこのような理由もある。

さて、私の地元・鹿児島市街地では、桜島観光のためのフェリーでキャッシュレス決済が可能になって利便性向上や混雑軽減につながった。またクルーズ船の寄港やアジア圏からの旅行者増に対応して専用レジや外国語表記の増加、洋式トイレの設置などの変化も近年目立つように感じる。国土交通省がこれらの取り組みに対して事業費の最大3分の1を補助するとしたことも後押ししているようだ。

また今年6月、地元銀行の本社ビルが新築されたのと同時に、同ビル内に完全キャッシュレスの商業施設がオープンした。地元食材のブリやカンパチ、黒豚、黒牛やスイーツ等を使ったレストランなど14店が既に開業し、来年には物販30店も開業予定だ。ここでは現金は一切使えない。キャッシュレス後進県の鹿児島県では革新的なことだ。目的は何か。頭取によると、「地元の人に地元の食材を理解してもらい、機運を高める場にしたい」とのことだった³⁾。オープンから2か月経ち、「興味を持って訪れる方が多く、大きな苦情もない。高齢者や未成年者の抵抗感は思っていたほどではなかった」そうだ⁴⁾。

しかし鹿児島県全体をみると、過疎地や600もの離島があり、人口減少や少子高齢化が進んでいる。そこでは銀行の統廃合が進み、その銀行さえ、金融庁の規制緩和により平日に休業するかもしれない。ATMを利用するために、最寄りのコンビニまで30分掛けて車で行く、という住民もいる。インターネットバンキングの普及もあって銀行に足を運ぶ顧客は減少し、確かに銀行やATMは不要になりつつあるかもしれない。また、それらの手段に不慣れな高齢者には、農協や郵便局の職員が月に一度家に出向いて現金で取引をしている。それでな

んとかなり、私が「便利だ」と感じたキャッシュレス決済が無くても不便を感じることはない。高齢者は現金志向が強く、増税後のキャッシュレス決済に対する恩恵を受けることがなかなかできないかもしれない。購買意欲そのものがそれほどない人もいる。経済が活性化しないのも無理はない。

こんなところもある。県最南端に位置する与論島では、「キャッシュレスアイランドプロジェクト」が今年3月に始まった。観光立島である与論島では、島内で100を超える店舗がQRコード決済を導入し、マリンレジャーやレンタカー、食事や買い物と、島内の観光がスマホ一つで完結する。観光客はもちろん、島民の利便性向上や購買の活性化、加盟店における経理事務の省力化が期待できる⁵⁾。このような取り組みは日本全国の自治体やお祭り、スポーツの大会などでなされ、決済サービス各社が参入し利用者も増えているようだ。人が多く集まる観光地やイベントでは効果的だが、そうではないところ、鹿児島でいうならば多くの過疎地や離島ではそうはいかず、金融難民を生み出している。

私がキャッシュレス体験を通して考えさせられたことは、その土地に暮らす人々のお金の価値観や需要に合った決済方法を認め合い、都市と地方とでうまく共存していくことが大切ではないか、ということだ。世界では、国土が広大であるがゆえにATMの設置が困難でキャッシュレス化が進んでいるカナダや、銀行制度が未発達で治安も良くない中、携帯電話を使った送金サービスが普及したケニアのような国もある。現金を狙った犯罪の減少にもなり、これは鹿児島にあるような日本の過疎地にも当てはまることではないだろうか。高齢者のみならず、キャッシュレス決済に対して「怖い」「分からない」といった不安を持っている人もいるだろうが、チャージして使う電子マネーならば分かりやすく、記録が残ることで見守りツールとしての活用もできそうだ。そのためにも地元のスーパーや移動販売車に決済端末の導入をしてもらいたい。そうしなければ客側も何も変わることがなく、今までのままだ。

さて増税の10月が目前に迫っている。準備が遅れている感が否めないが、私たちのお金への関心も上がる良い機会と捉え、鹿児島のキャッシュレス普及率がどこまで上がるのかも見守っていきたい。

(注)

- 1) 野村総合研究所「平成 29 年度産業経済研究委託事業 我が国における FinTech 普及に向けた環境整備に関する調査検討 経過報告『キャッシュレス化推進に向けた国内外の現状認識』 諸外国におけるキャッシュレス決済の現状

URL https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/shoryu/credit_carddata/pdf/009_03_00.pdf

閲覧日 2019 年 8 月 25 日

- 2) 九州経済研究所「K E R 経済情報」 2019 年 3 月 (Vol.348)

- 3) K K B 鹿児島放送「J チャン+」 2019 年 4 月 24 日放送

- 4) 南日本新聞 2019 年 (令和元年) 8 月 30 日 12 面

- 5) ヨロン島観光ガイド トピックス「ヨロン島キャッシュレスアイランドプロジェクト始動！」

URL <http://www.yorontou.info/topics/e000314.html> 閲覧日 2019 年 8 月 25 日

<参考文献>

岩井昭男『キャッシュレス覇権戦争』 NHK 出版新書、2019 年 2 月 10 日

